令和５年９月５日　環境生活委員会開催状況　（環境生活部）

開催年月日　令和５年９月５日（火）
質　問　者　日本共産党　真下　紀子　委員
答　弁　者　環境生活部長　加納　孝之
スポーツ局長　高見　芳彦
スポーツ振興課長　松井　直樹

質　問　要　旨	答　弁　要　旨
●　北海道のスポーツ振興におけるジェンダー平等等の取組について 私は、あらゆる分野でジェンダー平等が必要だという立場でこれまで道議会でも各分野ごとに質問してきましたけれども、スポーツ振興においては初めての質問になりますので、議論の取っかかりになればと考えておりますので、よろしくお願いいたします。 旭川市出身の陸上選手の北口榛花さんが、世界陸上の女子やり投げで金メダルを獲得して、多くの方が激励をしたのだと思うのです。旭川市出身の金メダリストというのは、実は北口さんだけではなくて、女子柔道の恵本裕子さん、それから上野雅恵さんは２連覇していますね、上野順恵さんは世界選手権でも２連覇していまして、上野巴恵さんも、グランドスラム・東京2011の金メダリストと、多くの女性が競技スポーツ界で飛躍的に活躍をしております。 一方で、スポーツの実施率について調べてみますと、どうも性差があるのだということがわかりました。データで明らかになっているようです。そのほかにもカーリングや女子サッカー、ウィンタースポーツでは竹内智香さんなど道内の女子選手が非常に活躍されている中で、スポーツの実施率がなかなか性差がある中で、競技スポーツ界では活躍される方が生まれているのだけれども、そうではなく、もっと広範に道民がスポーツに親しんでいけるような環境を作っていくということが重要だと思っています。中でも課題となっているこのスポーツ振興におけるジェンダー平等等の取組について以下伺って参りたいと思います。	
（一）性別・年齢別のスポーツ実施率及び特徴について 性別・年齢別のスポーツ実施率及びその特徴についてお示し願いたいと思います。	**（スポーツ振興課長）** スポーツ実施率についてでございますが、令和３年度に道が実施いたしました「スポーツに関する実態調査」における週１回以上のスポーツ実施率は、男性では、２０代が７５．８％、３０代が６７．６％、４０代が５６．９％、５０代が６１．９％、６０代が６７．０％、７０代が７９．７％となっております。 女性では、２０代が７２．２％、３０代が６２．５％、４０代が５０．９％、５０代が４９．３％、６０代が４６．１％、７０代が５１．２％となっております。 ２０代の実施率は、男性・女性で大きな違いは見受けられませんが、男性の場合、２０代から４０代にかけて低下するものの、その後は年代が高くなるにつれて実施率も上昇している一方、女性は、２０代をピークに、年代が上がるほど実施率は下がる傾向となっております。
（二）性別により実施率の違いが出ている要因・背景について 数字が並んだのでわかりにくいのですけれども、道が策定したスポーツ推進計画の資料の中に、このようにグラフが載っていて、このグラフを見ると非常に明確に出ていて、今、松井課長が答弁されたような傾向というのが明らかになっているわけです。この道が策定したスポーツ推進計画では、性別によって実施率に違いが出ていることが明らかになっているのですけれども、その現状、それから要因・背景については言及されていないわけですね。道はどのように分析しているのか伺いたいと思います。 本当に有意な差が興味深い結果として示されたのです	**（スポーツ振興課長）** 性別によるスポーツ実施率の違いについてでございますが、スポーツ庁が令和４年１２月に実施いたしました同様の調査におきまして、スポーツを実施しない理由について複数回答で尋ねているところでございます。 それによりますと、一番多かった回答は「仕事や家事が忙しい」でありまして、男性で４１．３％、女性で４０．６％と、大差はなかったものの、次に多かった回答は「面倒くさい」で、男性は２４．９％、女性は３４．０％、そのほか「スポーツが嫌い」は、男性は５．７％、女性は１５．５％と、いずれも女性の方が多いという結果でございました。 道内の状況も同様のものと考えておりますが、今後の道の調査では更なる実態の把握に努めてまいります。

質　問　要　旨	答　弁　要　旨
ね。これはちょっと私も想定外でした。働き盛りと子育てとか、それから経済的な力の違いなどが影響あるのかなと思ったのですけれども、「面倒くさい」が出てくるとは思わなかったですね。でも、そのような実態があるということなので、実態に即した対応をしていくことが必要になってくるのだと思うのです。	
（三）性別によるスポーツについて スポーツ推進計画では、「スポーツの持つ力を最大限に活用し、あらゆる場面において、生涯にわたり、誰もが、それぞれの体力や年齢、性別、障がいの有無にかかわらず、目的に応じてスポーツに親しみ、ひいては社会に参画することができる環境づくりを促進していくことが重要」としています。確かにそうなれば良いわけですけれど、現実にはそうなっていないということがわかってきましたので、スポーツの実施について性別による格差があるということがわかったわけですから、その改善が必要という認識を道がお持ちなのかどうか。それから今後の取組の中で、どのように留意をされていくのか伺いたいと思います。	**（スポーツ局長）** 性別によるスポーツの実施率の差についてでございますが、道では、「第３期北海道スポーツ推進計画」に記載しておりますとおり、あらゆる場面において、生涯にわたり、誰もが、それぞれの体力や年齢、性別、障がいの有無にかかわらず、目的に応じてスポーツに親しむことができる環境づくりを推進していくことが重要と認識しているところでございます。 女性の実施率が低い要因などを踏まえながら、道としましては、今後とも、環境や社会状況の変化に対応しつつ、スポーツを「する」「みる」「ささえる」といった多様な関わり方も視野に、幼少期から日常的にスポーツに親しむ機会を提供するなど、誰もが生涯にわたってスポーツを楽しむことができるよう取り組んでまいります。
道のそういう取り組みを進めていくということはわかりました。	
（四）ジェンダー平等の位置づけについて そもそもスポーツ推進におけるジェンダー平等ということについてですね、この計画には具体的に表記されていないのですよね。それに対する対応というのも記載がないわけです。東京五輪パラリンピック開催の際にですね、「女性が参加する会議は長い」などの差別発言に象徴されて、日本のスポーツ界におけるジェンダーの深刻な問題が可視化されたと考えております。 計画の策定時に、ジェンダーの現状と課題などが、どのように議論されたのか、なぜ記載されなかったのかお聞きします。	**（スポーツ振興課長）** スポーツにおける男女平等についてでございますが、道では、「第３次北海道男女平等推進計画」に基づきまして、各部局において男女が共に活躍できる環境づくりを進めているところでございます。 スポーツの推進に当たりましては、計画策定時の「北海道スポーツ推進審議会」におきまして、女性特有の健康問題や女性アスリートの支援体制などについて、女性有識者より提起があり、その重要性について議論があったところでございます。 これらを踏まえまして、女性アスリート特有の健康問題はもとより、スポーツ団体等と連携の上、スポーツにおける多様な性のあり方・課題等について理解促進、誹謗中傷・ハラスメントの防止を図る旨を計画に記載したところでございます。
（五）北海道スポーツ推進審議会の性別比について まず、このスポーツ推進計画を作るにあたって、このジェンダー平等ということを盛り込もうという、そこまで認識が進んでいなかったのだと思うのですよね。それで、今答弁にあったように、今後の計画を推進していく上でも、この北海道スポーツ推進審議会が役割を果たすことになるわけですが、ここでの決定が非常に重要だと思います。道民がスポーツを行う上で、広い視野から検討し、建議を行う１５人で構成される機関ですけれども、現在、２名の審議会委員を公募中ですね。任期は１１月２日からの２年間で委員を公募中です。そこでお聞きしたいのですけれども、これまでの委員構成及び公募委員の性別比についてお示し願いたいと思います。	**（スポーツ振興課長）** 審議会委員の性別比についてでございますが、１５名の委員で構成されます北海道スポーツ推進審議会は、現在、１１名が男性、４名が女性であり、構成比は、男性が７３．３％、女性が２６．７％となっているところでございます。 前回の令和元年及び平成２９年の改選時は、１０名が男性、５名が女性であり、男性が６６．７％、女性が３３．３％でございました。 公募による委員２名につきましては、令和元年改選時に女性委員が１名就任しておりましたが、その他の期間は２名とも男性となっている状況でございます。
構成比において女性が非常に少ないということがわかったわけで、公募においては本当に女性が少ないと。そうすると計画を進めていく上での意思決定の場である審議会で、女性の意見というのがなかなか反映されにくいのではないかと考えるわけで、ここのところの性別比を、ジェンダー平等も絡んでいるから、発展させていく必要があると思います。そこは努力をしていただきたいということを指摘しておきます。	
（六）スポーツにおける女性の健康課題とジェンダー平等の推進について 先ほど申し上げた東京五輪・パラリンピックでは、汚職事件が起こりまして、加熱するスポーツ商業主義の弊	**（スポーツ振興課長）** 女性アスリートの健康問題などについてでございますが、北海道スポーツ推進審議会での議論を踏まえまして、医療機関と連携の上、女性アスリート特有の健康問題を

質　　問　　要　　旨	答　　弁　　要　　旨
害が表在化したと言えると思います。一方で、女性アスリートの健康課題にも注目が集まって、ここのところは良かったのではないかと考えるわけです。「利用可能エネルギー不足」「視床下部不正無月経」「骨粗しょう症」は、女性アスリートの三主徴と呼ばれる健康課題として指導のあり方が見直される契機となったということです。こうした問題を解決し、指導方法も改善していく上で、ジェンダー平等という観点は欠かせないと考えるわけです。スポーツ推進計画の推進において、重要な視点としてジェンダー平等を位置付けて、体制も見直していく必要があるのではないかと考えますが、いかがですか。 スポーツ団体などの構成が、そもそも男性が多いということがあるので、女性を審議会の委員にするというのは困難な面もあるんですけれども、やっぱり意図的にやっていかないと進まない問題なので、その努力をしていただきたいと思います。	はじめといたしまして、女性スポーツの現状や課題について、理解促進を図ることとしております。 今後、計画の推進に向けて、施策反映において女性アスリートの声が更に届くよう、今年度改選する審議会委員の任命にあたりまして、関係機関・団体に女性委員の推薦について働きかけるなど、道内の大学やスポーツ団体などと連携しながら、女性アスリート支援の取組を進めてまいります。
（七）安全安心の確保について それから、スポーツ界の問題として、直近で大阪の私立高校で元プロ野球選手が監督をしていたわけですけど、生徒に体罰を加えていたことが報道されたばかりで、その他にもマッサージと称して女子生徒にわいせつ行為を行うなど、スポーツ界でこうした体罰や暴力、パワハラやセクハラ、これが昨今問題となっているのです。女性アスリートの盗撮なども非常に深刻な問題になっています。計画では体罰や暴力の根絶と事故防止等スポーツの安全安心の確保を図ると記載されているわけですが、道はどのような現状認識をもってこれを記載したのか、そして今後の方向性について、指導方法も含めて、具体的にどう対応・改善していこうとしていくのか伺います。	**（スポーツ局長）** 安全・安心の確保についてでございますが、昨年３月に議員提案により制定されました北海道スポーツ推進条例では、「スポーツにおける体罰及び暴力を根絶する」と定めておりまして、指導の現場においても体罰や暴力は許されるものではないと認識しております。 道といたしましては、本人の希望しない理由などでスポーツから離れたり、スポーツに親しむ機会を奪われたりすることがないよう、スポーツをする方々の心身の安全・安心を確保することが重要と認識しております。 このため、道では、スポーツにおける暴力行為等に関し、相談や問い合わせにつながるよう、日本スポーツ協会や道スポーツ協会が設置しております相談窓口について、道のホームページで紹介しているほか、道スポーツ協会などと連携いたしまして、競技団体の指導者などが集まる場を活用し、暴力行為等の根絶の周知や相談窓口の紹介を行っております。引き続き、スポーツ団体と連携し、安全・安心の確保に向け、取り組んでまいります。
（八）誰もが楽しめるスポーツ環境の実現について スポーツは楽しく行うことが大切だと思うんですよね。だから勝利至上主義になったり興行主義になったりすることがないように、これから変えてく時代だと考えております。競技スポーツや経済振興偏重となることなく、計画が掲げた誰もがスポーツを楽しむことができる環境の実現、経済的心配をしなくてもスポーツができることが大変重要だと考えます。誰もが楽しめるスポーツ環境の実現に向けて、道がどう取り組んでいくのか、部長の見解を伺います。	**（環境生活部長）** 誰もが楽しめるスポーツ環境についてでありますが、道民の皆様が、スポーツを通じて、健康で豊かな生活を形成することや、魅力ある人づくり、地域づくりに取り組むことが重要との認識のもと、道ではこれまで、地域においてスポーツに親しむ環境の充実を図るため、プロスポーツ選手を講師とした子ども向けのスポーツ教室や、障がい者スポーツの体験機会の提供など、様々な取組を実施してきたところであります。 道といたしましては、今後、スポーツ実施率における男女の差や女性の健康問題など、スポーツに取り組む女性の声も受け止めながら、スポーツを「する」だけではなく、「みる」「ささえる」といった多様な関わりを通じて得られる「スポーツの持つ力」を最大限活用して、いつでも、どこでも、そして誰もが日常的にスポーツに親しむことができる環境づくりに一層取り組んでまいります。
この質問をするにあたって意見交換をする中で、スポーツと健康増進やレジャーとの線引きが難しいと伺ったのですね。なるほどと思ったのですけれども、結局、特に女性の場合は健康増進でやっていることがスポーツだと認識していなかったり、競技スポーツでないものはスポーツだと認識しないながらも、スポーツに親しんでいる現状があるのではないかと思うわけですね。ですから、そうしたことも含めて、誰もが、どこでもスポーツに親しみを持って楽しむ機会を持てるように、ぜひ努力をしていただきたいと思いますし、その際に、社会的につくられた性差、ジェンダーというものを乗り越えて、平等に自ら楽しめるようにしていくために力を合わせていきたいということを申し上げて質問を終わります。	